

— サムエル上1章・20-22,24-28、1ヨハネ3章・1-2、ルカ2章41-52 —

祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったのので、捜しながらエルサレムに引き返した。三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された

-ルカ2章-

いのち・愛の関係性



聖家族の模範は、三位一体の神様です。三位一体は、父と子が聖霊によって一つになっている愛の関係性で成り立っています。それで 聖家族は、それぞれが愛を全てとする命によって成り立っているのです。愛する者同士が結ばれてわが子を得、家族は三位一体の神の至福に与るのです。互いが愛する愛を全てとする限り、この聖なる絆はほころぶことはありません。

神様が、人類を救うために、「家庭で育つ人」となって、世界に愛をもたらし、世に来ることを計画

された時、命の母親になってくれる女性をマリアさまに頼みました。マリアさまは自信家ではありません。自分がひとかどの者でないことを知っている貧しい人です。『私には出来ませんが神に出来ないことは何一つありませんから、あなたのお言葉なら実現します』と答えて、自分の思いを退け、神のはしめとして単純、素朴に『親業』に専念しました。ここに真に命の親となる信仰者の姿があります。親の使命は、子どもに命の安心を与えることからスタートします。最も弱く貧しく生まれてくる命は危険を察知すると、生涯持ち続けることになる『いのちの危機』がインプットされ、それは自我の確立と共に表面化して他の援けはすべて退けて自分で自分を守るようになり、周りは手が付けられない状態になるのです

いのちが最も貧しく造られ、そのいのちの母親が最も豊かに造られたのは、赤ちゃんにとって母親が全てだからでしょう。父親はその母子を支えるヨゼフさまの使命を受けて、私たち人類は、この聖家族を模範に戴いているのです。「無条件の愛」を受けた子どもは、与えることが喜びになる大人に成長します。与えることが喜びの大人が結ばれて二人は至福を得、生まれてくる子どもは夫婦の愛情のおこぼれで育つと言われるのです。愛する人になるために、愛された体験が必要であることを「いのち」は何よりも求めて聖家族を必要とするのです。 2021年12月26日 主任司祭 昌川信雄